

令和4年度 自己評価書

学校園名 附属世田谷小学校

1 学校経営計画
別紙のとおり。

2 自己評価

領域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	評価	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
学校運営	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが安心して集える学校を目指して組織的に活動する。特に日常的観察とその共有を重視する。 評価法：毎学期の振り返り、 日常の観察、アンケート等 教員は、互いに尊重し合い、協働的に仕事に取り組むよう努める。また、仕事の効率を高め、本質的な課題に注力し、教育を追求することを通じて精神を豊かにしようと努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 「豊かな心とたしかな力を育てること」を重点課題とした。 本年度より、Home・Classの活動領域での生活が始まり、Laboratoryを合わせた3つの活動領域での生活となった。 Homeの活動においては、これまで異学年で生活する場面は、1・2年生のお相手さん活動と地域班活動と限定された場面だけであり、年度当初は、毎日の生活で異学年活動を行うことに戸惑いを見せる子ども、保護者の姿も見られた。特に上級生にとっては、それまで同学年主体での活動から一変し、下級生のお世話をしなければならないという責任感、負担感を感じている姿も見られた。 しかし年間を通して活動を行うことで、異学年で生活することに力みが徐々に減り、自然なかかわり方ができるようになってきていると感じることができた。 今年度の卒業の会では、一年間ともに生活した卒業生を、心から祝福し、送り出そうとする姿を感じることができ、Homeでの活動の成果を感じることができた。 児童一人一人に寄り添う学校の基本姿勢は教育活動全般で概ね実現できた。 今年度は教育相談体制の充実を目標に 	C	<ul style="list-style-type: none"> 児童理解の重要性への再認識を図ることと保護者との意思疎通をより丁寧に行うこと。 今年度は教育相談体制の充実を図ってきたが、さらなる充実に努める。予防的対応・早期対応を心がけ、組織的な相談対応に努める。また、必要に応じ外部機関との連携も学校システムとして積極的に図っていく。 特に特別な支援が必要な子どもに対しては、個別支援計画、保護者との連携を積極的に行い、外部機関との連携を深めていく。 学びに向かう心、向上心や好奇心や探求心の育成は本校の教育モットーであるが、今年度重点にしてきた、やさしさ、おもいやり等の心を育てるための手だてを工夫し、より一層の充実に努めていく。さらに、いじめ等の諸問題への対応と連携させて取り組んでいく。 毎週水曜日の朝の時間を「朝Class」の時間とし、道徳の充実と、Classで起こっている問題などについて考える時間とし 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者や地域と連携した危機管理体制をさらに充実させること。 Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での教育課程で、一年が経過した。3つの活動領域が互恵的かつ有益に機能していることについて、考察し、より一層の教育課程の充実に努めていく。 また、そのことを、保護者にも積極的に発信していく。

		<p>進めてきた。個別対応の必要な子どもについての情報を教育相談部で集約し、組織的対応が機能してきたことは大きな成果である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 校務分掌を改編し、原則、一人一役としての初年度であった。教員の校務の標準化を目指してきたが、Home担当、Laboratory担当、等も兼ね合わせて、さらに校務の標準化を図っていききたい。 新型コロナウイルス感染防止の観点からオンライン会議を多く活用してきたが、共通理解を図るためには、対面で会議する価値も改めて感じている 情報の公開発信のためのホームページの整備を進めている。 一昨年度から発育調査に関することはオンラインで対応するようにしたが、今年度もそれを継承し、ホームページやオンデマンド配信での学校説明会を有効に活用した。本校の教育について広く公開する一助となったものと思われる。 定期的な安全点検で施設面等の安全管理はできた。 保護者アンケートの実施等、学校評価情報の集約に努力している。 		<p>ていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> 施設を含めた学習環境の整備に努めること。また、今後エアコンの更新、校庭の整備など、高額であり、経年劣化が明らかな施設設備に関しては、計画的に必要な経費の貯えを行い、整備に努めていく。 会議については、今後、コロナ感染症が5類に移行することを踏まえ、対面での会議とし、全教員が共通理解のもと、学校運営に携わっていききたい。 	
<p>教育活動</p>	<p>◎ 学びを自分でデザインする子の育成。</p> <ul style="list-style-type: none"> 発達段階に応じて学びを自分でデザインできる子どもを育てる。 評価法：児童に何らかの側面で学びを自分でデザインさせることができた場合：+1、例年と比較して特段の変化を認めない場合：+0、学びの自律性の低下を招いてしまったと判断する場合：-1 <p>◎ 上記のような学びの発生する場をデザ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動は、本年度より、Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での活動となった。 4～6年生のLaboratoryでは、一人ひとりが計画した課題に基づき、自分で学びをデザインし、探究的に学びを進める姿が見られた。3年生のLaboratoryでは探究の仕方などを学び、4年生以降のLaboratoryにつながる学びとすることができた。 従前の運動会は、今年度からスポーツ 	<p>C</p>	<ul style="list-style-type: none"> Homeを主体とした学校行事について系統的に育てていくようなカリキュラムを編成していく。その一環として、Homeを活動単位として行事を編成する。入学の会をHomeでお迎えすることをはじめとして、1学期中頃に全校遠足、夏休みに宿泊活動、2学期中頃にはスポーツフェスティバル、後半にはHomeフェスティバル、そして一年の集 	<ul style="list-style-type: none"> Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での教育課程になっての2年目となる。コロナ感染症が5類へ移行することに伴い、保護者が学校に来校する機会も増えてくる。 実際に保護者に学校の様子を参観していただき理解を深めていきたい。

	<p>インする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童が自らの学びをデザインすることを誘発する場、カリキュラム、相互作用を設計し、実験し、知見を共有する。 	<p>フェスティバルに生まれ変わり、活動主体も学級からHomeへと移行した。勝ち負けだけに固執せず、当日を迎えるまでの過程を重視し、生涯スポーツにつながるような活動となったととらえている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 宿泊行事についても、活動主体が学年からHomeへと移行し、異学年での活動となった。各Homeで活動内容を計画するなど、Homeで活動をデザインする活動も取り入れて実施した。実施直前に抗原検査を行い、感染予防対策を行って実施したが、残念ながら宿泊で感染したと思われる事例があり、今後の課題となった。 ・ 児童の個別指導、進学指導において、可能な限り保護者と直接話し合う機会を持ち相互理解に努めるようにした。 ・ 個別の案件に関しては教育相談システムを活用しながら迅速で丁寧な対応を心がけた。今後はさらに組織的対応に努める。 ・ 今年度もスクールカウンセラーを2名配置することができた。 	<p>大成として卒業の会を計画する。</p> <p>この年間通じてのHomeでの活動を通して、異学年でお互いを尊重しながら生活をデザインし、異質共存、公共性を育てていきたいと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員と保護者は子どもを育てる両輪であり連携は必須。その関係性の分断は即問題となるので、普段からの良好な関係づくりに配慮する。 <p>来年度は、コロナ感染症が5類へ移行することを受けて、対面での保護者会、授業参観の機会を設定し、保護者との意思の疎通に努めていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学との連携として、SSWの活用、特別支援教育に関わる体制整備が年々進んでいることは評価できる。指導側の人的保障と保護者に理解・協力を得ることに継続的に取り組みたい。今後も支援員の配置は不可欠であり、人材確保を含め大学と協働していきたい。 ・ 進学進路指導は附属中学校の理解のもとに円滑な連携を図れているが、さらなる相互理解・連携により小中一貫教育のよさを確かにしていきたい。 	<p>そして成果を実際の子どもの姿で見えていただき、課題については、改善を図っていく。</p>
<p>研究活動</p>	<p>○ 研究上の提案や成果を積極的に公開する。</p> <p>評価法 :研究論文や著書などの件数(目標値 1/年) 研究授業の公開件数(目標値</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「『学びを自分でデザインする子ども』を育む教育課程の創造」を研究開発課題として4年間の文部科学省の研究開発学校の指定を受けている。 <p>一昨年度が名目指定となったため、今</p>	<p>C</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究開発学校として最終年度の来年度は、Home・Class・Laboratoryの3つの活動領域での教育課程について成果と課題をまとめる年となる。具体的な 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際にHomeの活動を実践し、保護者のアンケートからも新しい教育課程についての不安の声もあったが、一年間を終えて

	<p>1/年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学会・研修への参加を積極的に行い、研鑽に努める。 評価法：学会・研究会の発表件数(目標値 1/年) ○ 大学との連携活動回数(目標値 1/年) 	<p>年度は3年次にあたる。今年度は、先行実施したLaboratoryに、Home・Classの活動領域を加え、3つの活動領域での生活となった。</p> <p>今年度は、先行実施した Laboratory について成果と課題をまとめ、2月18日には研究発表会を開催した。6つのLab.について授業公開し、感染予防の観点から、対面参加者は各 Lab. 20名まで、合計120名に制限し、オンライン参加とハイブリッドでの開催とした。</p> <p>来年度は最終年度となり、Home と Class を含めた教育課程について、成果と課題をまとめ発表する予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 対面での公開授業研究会については、今年度も新型コロナウイルス感染対策として、中止とした。しかし、オンライン研究会の開催、現職研修会は、オンライン配信を活用し、新型コロナ禍でもできる限りのことを実施した。 		<p>子どもの姿をもとに、研究成果をまとめていく。</p> <p>また、研究開発終了後の教育課程についても、方向性を定めていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員の力量形成については、日常的な授業研究、自主研修を通して、一層の改善を求めている。 ・ 地域の拠点校を目指すための取り組みとして世田谷教育委員会や東京都との研究上での連携強化を図りたい。 ・ 発信力を高める意味で研究内容をHPで公開するなど、周知の方法を工夫する必要がある。 ・ 研究の進め方については、教員間での意思の疎通に努め、共有を図るよう努めたい。 	<p>、保護者の理解も進んできたと感じている。</p> <p>一方で、Home、Class、Laboratoryでの子どもたちのトラブルも散見される。</p> <p>子どもも保護者も、各活動領域で安心して生活できるよう、教員間の情報交換を密にしていくとともに、保護者が安心できるような体制づくりに努めていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Laboratoryの活動では外部の人材活用なども積極的に取り入れ、活性化を図っていきたい。現在、同窓会の方との連携を図っている。
<p>学生の教育・支援活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学部教育実習、教職員大学生実習、学外者教育実習などを積極的に行う。 評価法：担当数(目標値 2/年) ○ 教育実習において、実習生の精神的支援に心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本学学部より必修実習157名、選択実習13名を受け入れ、実習は順調に進み、計画通りにおこなうことができた。 ・ 本学、大学院修士課程2年の心理実習学生3名を年間通して受け入れ、1年間という長いスパンでの子どもたちの成長の様子を体験的に学ぶ場を提供することができた。 	<p>C</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ感染症が5類移行後の教育実習のあり方をどうするのか(給食指導等)など、より充実した実習となるよう方法を工夫していく。 ・ 実習生への個別対応に関して大学と連携した共同指導体制が整備されたことで丁寧な指導ができるようになった。今後も維持したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし
<p>社会貢献活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現職者研修、研究セミナーなどを積極的に行い、知識・技能の共有に努める。 評価法：現職者研修開催回数(目標値 1/年) 社会貢献活動回数(目標値 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オンラインでの現職教員研修会を実施。R4.8.19 参加申込60名。 ・ 今年度は、東京都で比較定感染が落ち着いた6月18日に長崎大学附属小 	<p>D</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 例年は、外国を含め国内各地からの参観者訪問が日常的にあるが、今年度も新型コロナウイルス感染状況に照らし合わせながら可能な受け入れを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

	1/年)	学校より2名、2月26日に玄海みらい学園より2名、の視察を受け入れることができた。		<p>学校参観や研究訪問については今後も可能な限り受け入れたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 社会貢献としてまた自己研修の場として今後も「現職研修会」を継続していく。東京都や世田谷区と連携をしながら、より広く、充実した研修会にするよう努めていく。 	
--	------	---	--	---	--

3 その他特記事項

- 今年度は、Home、Class、Laboratoryの3つの活動領域での教育課程初年度であり、重点的に取り組んできた。Homeを活動単位として実施した宿泊行事、スポーツフェスティバルは、新しい形の実施となり、計画に時間がかかったが、次年度への礎となったと感じている。今年度の成果を基に、次年度、さらにブラッシュアップしていく。